様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０５５８６・１９Ｋ２０７９５

研究課題名（和文）東アジアにおける西洋古典の受容―比較史的研究への試み

研究課題名（英文）Reception of Western Classics in East Asia

研究代表者
泰田　伊知朗（Taida, Ichiro）

東洋大学・国際観光学部・教授

研究者番号：２０８２２０７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では日本における西洋古典の受容について、特にアジア全体を視野に入れながら研究を行った。この受容に関し、日本はアジアの中で最も古い。16世紀末よりイエズス会宣教師によってラテン語教育が行われ、辞書や文法書も印刷され、西洋古典の一つ『イソップ物語』が邦訳された。江戸時代でも前野良沢がラテン語の詩を翻訳している。明治に入るとラテン語教育が再開され、ラテン語文法書、辞書が多く出版された。そして1950年に日本西洋古典学会が成立した。このように日本は早くから西洋古典を受容し、西洋人の手助けを仰ぐこともあったが、基本的には日本人自身による受容を進めて来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
元来、西洋のものだった西洋古典は、16世紀に来日したイエズス会宣教師たちによって日本にも伝えられ、以降様々な人々によって受容が進められた。日本の西洋古典受容史は現在注目を集めており、本研究はその受容史を調査し、研究成果を海外へと発信する。
　他の東アジア諸国も、日本と同じように西洋古典を受容してきた歴史を持つ。受容経路や現状は国によって異なるが、それらを比較調査し結果を共有することは、東アジアの研究者たちだけではなく西洋古典を伝える側の西洋人にとっても意義深いであろう。研究代表者は海外の研究者たちにも研究成果を積極的に発信し、新たな東アジアの学術共同体の設立に向け努力している。

研究成果の概要（英文）：In Japan, we have roughly a 400-year history of Classical studies, beginning with an introduction by European missionaries. Because of this lengthy history, we now have a vibrant and well-established society of Classical studies in Japan. The Classical Society of Japan is an association for promoting Classical studies in the country. Founded in 1950, the association currently has over 500 members; the majority of whom are Japanese university professors who teach Western classical languages, literature, history, philosophy and other subjects.
This research introduces the chronology of related events, from the first pedagogical instruction by European missionaries, to the efforts of Japanese scholars wishing to study and promote Classical studies within Japan. This research also describes how Greek and Latin studies have been received in Japan over the past four centuries.

研究分野：西洋古典学

キーワード：西洋古典学　受容史　日本　東アジア　古代ギリシャ　ラテン語　翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

西洋の古典文献を研究する学問を西洋古典学と呼ぶが、西洋古典学では古代の作品の研究だけでなく、西洋古典を受容してきた歴史も学問の対象となっている。とくに J. E. Sandys の History of Classical Scholarship (1903, 08)の三巻本や、R. Pfeiffer の同名の History of Classical Scholarship(1968, 76)の二巻本が名高い。そこでは古代から 19 世紀までの西洋各国での西洋古典の研究と受容の歴史がまとめられ、研究成果だけでなく、研究者の人間関係、人物像まで詳しい説明がなされている。こうした著作では、特にルネサンス以降に関しては各国別に分けられているが、「日本」及び他のアジア諸国のカテゴリーは見られない。だがアジア、特に日本の西洋古典受容の歴史は決して浅いものではない。16 世紀にはイエズス会宣教師たちによって西洋古典の作品が持ち込まれ、ラテン語教育が行われていた。

また近年、日本における西洋古典受容史は研究者たちの注目を集めている。例えば 2013 年にベルリンで国際会議 The Reception of Greek and Roman Culture in East Asia が開かれた際には、東アジアにおける受容史が論じられ、日本に関する発表も多くあった。今後、国際化の流れの中で、日本の受容史はより注目を集めることになる。新たに出版されるであろう History of Classical Scholarship に Japan というカテゴリーを含ませるためにも、日本の西洋古典の受容史を早急にまとめて行くことが必要である。

２．研究の目的

日本での西洋古典の受容史をまとめていく上で、細かい歴史上のトピックについてはまだ注視されていない点も多い。本研究では日本での受容史をまとめるという大きな視点を持ちながら、かつ細かな点に関しても注意を払い受容史を整備する。

３．研究の方法

研究方法に関しては基本的には文献調査が中心であるが、本研究ではインタビュー調査も積極的に取り入れた。特に日本学士院会長を務められた久保正彰先生には、昭和における日本の西洋古典学の状況について詳しく伺うことができた。いただいた貴重な証言をもとに受容史研究を進めていきたい。

４．研究成果

現在までに公開された主な研究成果は、以下の 4 点の論文である。

①Ichiro Taida, ‘History and Reception of Greek and Latin Studies in Japan,’ Receptions of

Greek and Roman Antiquity in East Asia (Brill) 73 – 87, 2018 年 11 月。

本稿は、日本における西洋古典の受容史をまとめ、その流れを解説したものである。大手出版社 Brill から出版された論文集に収録されている。

その受容史を簡潔にたどると、以下のようにまとめられる。初めて西洋古典文学が日本語に翻訳されたのは、イエズス会による 16 世紀末の『イソップ物語』の翻訳である。当時イエズス会によってラテン語教育が行われており、辞書や文法書も印刷されていた。その後キリスト教が禁止されるが、江戸時代後半に蘭学が勃興すると、前野良沢が幕府の命に従いラテン語詩の翻訳を作成し、宇田川榕菴はギリシャ文字に関する小論を残している。

明治に入り宣教師によるラテン語教育が再開され、医学を学ぶ人のためのラテン語文法書、辞書が立て続けに出版された。東京帝国大学では神田乃武などがギリシャ語、ラテン語の教授をつとめた。1893 年にはドイツからラファエル・フォン・ケーベルが来日し、21 年間に渡り哲学、美学、そしてギリシャ、ラテンの言語と文学を教えた。彼の孫弟子に当たる世代の人々によって日本西洋古典学会が成立し、1950 年 10 月 22 日に京都大学文学部において設立大会が開催された。その中心になったのは、初代委員長になった呉茂一である。

日本における西洋古典受容の特徴は、西洋の宣教師やケーベルなど西洋人の助けを借りながらも、日本人による受容が行われた点にあると言える。特に日本西洋古典学会が設立されて以降は、日本人による西洋古典研究も発展し、単に受容するだけではなく、欧米への発信が試みられている。

②泰田伊知朗、「フランシスコ・ザビエルが携わったアジアにおける語学教育」、『観光学研究』、 18 号、117 – 125、2019 年 3 月。

フランシスコ・ザビエルはヨーロッパを出てからインド、東南アジア、日本などで布教活動を行なった。現存する彼の手紙の中では、ゴアとマラッカでのラテン語教育に関する言及がしばしば見られる。だが日本に関してはそうした記述はない。ラテン語教育に関し両都市と日本の間に違いが生じた大きな理由として、ザビエルの時代にはゴアとマラッカはすでにポルトガルの植民地であったのに対し、日本はそうではなかったということが想定されうる。この推測を確認するにあたって、本稿ではゴアとマラッカの政治状況とその中でザビエルが推進したラテン語教育について概観し、そして両都市と日本におけるザビエルの状

況を比較する。

③泰田伊知朗、「前野良沢『西洋画賛訳文稿』の研究：カタカナ表記に関わる異読について」、『東京大学草創期とその周辺：2014–2018 年度 多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』、136 – 145、2019 年 3 月。

前野良沢（1723–1803）は、徳川将軍家から将軍家所蔵の西洋画に付されたラテン語の詩文（画賛）を翻訳するよう命じられた 。その絵画と画賛を含む本の題名は、Venationes Ferarum, Avium, Piscium, Pugnae Bestiariorum & Mutuae Bestiarum で 1580 年ごろにアントワープで出版されたものである。この本はおよそ 100 の西洋画を含み、各画の下方にラテン語のヘクサメーターの 2 行詩もしくは 4 行詩が書かれている。したがってこの本に含まれているのは約 100 の画賛であるが、そのうち 9 つの画賛を前野は翻訳した 。この翻訳は『西洋画賛訳文稿』と題され、1779 年に作成された。

それぞれの画賛を翻訳するにあたって前野はまずそのテキストを横書きで写す。続いてそのテキストの下に、縦書きの讀法、釋言、切意という 3 つの部分が右から左へと続く。テキストに記されたラテン語の各単語のカタカナの読みが、テキスト、讀法、釋言という 3 つの箇所に書かれている。ここで問題となるのは同一単語のカタカナ読みが 3 箇所の中でしばしば異なることである。例えば fraudatur という単語が、テキストでは「フラウダチュル」、讀法では「フロオダチュル」、釋言では「フロオダテュル」と 3 箇所で異なる形で書かれている。

こうした異読がどうして生じたのであろうか。この疑問に取り組むにあたって、まず異読が生じている単語を整理し、その傾向について考える必要がある。本稿では異読の一覧を示し、それらを分類し考察した。

④Ichiro Taida, ‘Francisco Xavier's activities regarding the Japanese language,’ Acta Missiologica (ESCI), vol. 14(1), 8 – 20, 2020 年 4 月。

本稿は、フランシスコ・ザビエルの日本語に関連する活動について論じたものである。西洋人宣教師にとっての日本語などアジア諸言語の学習は、彼らが現地の人々に行うラテン語教育と表裏一体の関係にある。1595 年に作成されたラテン語・ポルトガル語・日本語辞

典には、それが日本語学ぶ西洋人とラテン語を学ぶ日本人のために作られていることが表紙に書かれている。従って西洋の宣教師の日本語学習を扱った本稿も、西洋古典受容史研究の一つと位置付ける。

ザビエルはイエズス会宣教師として、インド、マラッカ、モルッカ諸島などのアジア諸地域で布教活動を行い、その後 1549 年 8 月に日本に到着した。訪れたアジア諸地域における彼の現地語に対する姿勢には、ある程度決まった型が見られる。ザビエルはアジアの現地語をそれほど学ばなかったし、それらを流暢に話すことはできなかった。彼はローマ字で書かれた現地語のスクリプトを手に、現地の人々に話しかけた。しかしながら彼は現地語を学ぶことを重視し、他の西洋人たちにはそれを学ぶよう奨励し、現地語を扱える人を高く評価した。また通訳を養成し、アジアの言語を分析することにも力を注いだ。

日本語に関しても彼はほとんどできなかった。だが彼は、後に続いたイエズス会士たちが作り上げた日本語学習システムの種をまいたと言えるほど、日本語の研究および通訳養成に力を注いだ。

そのほかに以下の口頭発表を行った。

泰田伊知朗、「日本における外国語教育の歴史：ラテン語教育とラテン語受容を中心に」、2019 年第一回日本語教育・日本学研究シンポジウム（桂林理工大学） 2019 年 11 月 23 日。

泰田伊知朗「日本における西洋古典受容の夜明け前： フランシスコ・ザビエルとラテン語そして日本語」 、日本における西洋古典受容ワークショップ、 2019 年 5 月 25 日。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Ichiro Taida	４．巻 -
２．論文標題 History and Reception of Greek and Latin Studies in Japan	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Receptions of Greek and Roman Antiquity in East Asia (Brill)	６．最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 泰田伊知朗	４．巻 18
２．論文標題 フランシスコ・ザビエルが携わったアジアにおける語学教育	５．発行年 2019年
３．雑誌名 観光学研究	６．最初と最後の頁 117-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ichiro Taida	４．巻 14
２．論文標題 Francisco Xavier's activities regarding the Japanese language	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Acta Missiologica	６．最初と最後の頁 8-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 泰田伊知朗
２．発表標題 日本における外国語教育の歴史：ラテン語教育とラテン語受容を中心に
３．学会等名 2019年第一回日本語教育・日本学研究シンポジウム（桂林理工大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 泰田伊知朗
２．発表標題 本における西洋古典受容の夜明け前： フランシスコ・ザビエルとラテン語そして日本語
３．学会等名 日本における西洋古典受容（慶應大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

泰田伊知朗、「前野良沢『西洋画賛訳文稿』の研究：カタカナ表記に関わる異読について」、 『東京大学草創期とその周辺：2014－2018年度 多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』、136 – 145、2019年3月。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関